

折々の銘 21

【柳絮】りうじよ

柳の花が咲いた後の綿毛状の白い種子、あるいはその種子が飛ぶ様を柳絮[リュウジョ]とといいます。絮とは真綿を意味します。

空を舞う柳絮は風が静まると地上に降り、丸くまとまって転がり、やがて土に馴染んで発芽の時期を待ちます。

残念ながら私はテレビ画像や写真でしか見たことがありません。是非実見したいものです。春風に任せてふわふわと舞うその姿はさぞや長閑でしょうね。

柳絮の漂う様は古来中国では清明(陽暦4月5日頃)の風物とされてきました。

東欄の梨花 蘇軾

梨花淡白にして 柳は深い青

柳絮飛ぶ時 花 城に満つ

惆悵たり 東欄の二株の雪

人生 看得ん 幾たびの清明を

[梨花の花はほんのり白く、柳は緑濃い。柳絮が舞うとき花は街に咲き乱れる。

何とも美しいのは東の柵の中には二株の雪のような梨花の。

生涯の中でこのような美しい清明の様を何度見ることができるだろうか。]

本来、シダレヤナギを柳、カワヤナギを楊、柳の種子を柳花、楊の種子を楊花と区別したようです。

しかし、少なくとも漢詩の世界では楊柳という言葉があるように両者の区別は厳密ではなく、柳花も楊花も柳絮の同義語としてよいと思います。

ちなみに、植物のご専門の方にお尋ねしたところ、柳はことのほか種類が多く数百種に及ぶそうです。

唐の詩人劉禹錫の「楊柳枝詞」の一節に「数株の残柳 春に勝へず 晚来 風起こりて 花 雪の如く」とあるように柳絮はしばしば雪に喩えられます。

逆に雪を柳絮に喩えた例として「柳絮の才」の逸話が思い出されます。

晋の国の謝安は急に降り出した雪を何に喩えるかと問うた時、甥の謝朗が塩を撒いた様だと答えたのに対し、姪の謝道韞が春風に舞う柳絮に喩え謝安を感心させたそうです。非凡な才を持つ女性を「柳絮の才」と称するのはこの話が本です。

空海の著した漢詩作り便利帳とでもいうべき『文鏡秘府論』にも、雪の比喩に用いる語として月光・玉礫・瓊砂・梅花・粉・蝶などと並んで柳絮が挙げられています。柳絮と雪は古くからから契りを結んでいたようです。

柳の枝を折って環に結び、旅立つ人に贈る習慣を折楊柳[セツヨウリュウ]、縮柳[ワンリュウ]、

あるいは結び柳といいます。柳の生命力にあやかり無事を願うとも、柳の長い枝で旅立つ人を引き止めるとも、柳【liu】の音が留【liu】に近からとも、結ぶ環が還の字に通じ帰還を期待する意とも、魂を鎮める呪いとも解釈されています。

利休が胡銅花入「鶴の一声」に柳をむすんで送別の茶会に入れたという伝えがありますが折楊柳の倣いに外なりません。

三月四月は年度の替わり目、送別の季節でもあります。送別茶会などに応用できそうですね。

日本には中国にはない柳の特殊な扱いがあるようです。

蹴鞠は木を四方に植えた懸[カカリ]と呼ばれる場で行うが正式です。

東北に桜・西北に松・西南に楓・そして東南に柳を配するのだそうです。

この木を本木といい、鞠を蹴る人々の位置が定まり、蹴り上げる高さの目安にもなるのだそうです。

後には本木を懸といい、蹴鞠する場を鞠の壺といったそうです。

蹴鞠などやってみたい遊戯ですね。

柳は茶道具の意匠に極めて多く採り上げられているモチーフであることは皆様ご承知のとおりです。

その根拠は単なる季節感というだけにとどまらず、春の喜び・生命力の謳歌などの意味が込められていると思われます。

日本には「三十三間堂棟木の由来」など柳に関する奇異譚も多く、興味深いものがあります。奇異譚について書くのは来年の春まで待ちましょう。

<http://www.morita-fumiyasu.com/>

~ Copyright (C) 2011 ~私の書齋~ 森田文康. All Rights Reserved.~